

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

媒介的自立の哲学

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

田辺 元

SAMPLE

媒介的自立の哲学 書肆心水
田辺哲学イントロダクション

Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

目次

常識、哲学、科学						
科学性の成立						
物理学と哲学						
量子論の哲学的意味						
倫理と論理						
キリスト教とマルクシズムと日本仏教——第二次宗教改革の予想						
正法眼藏の哲学私観						
西田先生の教を仰ぐ						
275	218	159	117	88	48	31	8

索引（キーワード＋主要人名）
田辺元略年譜＋著作リスト
318 303

凡例

一、本書は、田辺哲学の入門書となることを意図した、書肆心水による田辺元の論文選集である。

一、底本には筑摩書房版田辺元全集を使用し、新漢字、新仮名遣い表記とした（引用語句の仮名遣いはもとのままとした）。

一、踊り字は「々」のみを使用し、「こ」は「々」に置き換えた（引用語句中ではもとのままとした）。

一、読み仮名ルビを多少補った。

一、「」は本書刊行所による補註である。

一、入門書を志向する本書では、表記については読みやすさを宗として、現今一般に漢字表記が避けられる傾向のある下記の語を平仮名表記に置き換えた（送り仮名と踊り字の有無は代表例）。

亞米利加（アメリカ）、英吉利（イギリス）、聊（いささか）、苟も（いやしくも）、所謂（いわゆる）、
愈々（いよいよ）、況や（いわんや）、印度（インド）、此の如く（かくの如く）、加特力（カトリック）、
希臘（ギリシャ）、基督（キリスト）、此（ここ）、此処（ここ）、此（この）、是れ（これ）、此（これ）、
之（これ）、曩に（さきに）、併し（しかし）、屢々（しばしば）、瑞西（スイス）、其処（そこ）、其（そ
の）、抑も（そもそも）、其（それ）、夫々（それぞれ）、啻に（ただに）、独逸（ドイツ）、猶（なお）、就
中（なかんずく）、之（の）、亦（また）、齎す（もたらす）、固より（もとより）、稍々（やや）、所以（ゆ
えん）、猶太（ユダヤ）、羅馬（ローマ）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

媒介的自立の哲学

田辺哲学イントロダクション

常識、哲学、科学

（一九三六年）

我々の常識が哲学に要求し期待する所は、単に日常生活に処して誤らざる正常健全の良識たるに止まらず（これは常識そのものの自ら標榜する所に外ならない）、更に平常的な常識の規準がその効力を失い価値の判断が方向を喪失する如き非常特別の危機に際しても、価値の顛倒から新しき価値を創造し、相対的なる規準の喪失に於て絶対的なる規準を獲得せしむる如き叡知たることにある。斯くて常識の混乱に陥る多岐矛盾の間にあってその立つ所を奪われず、常識の蹉躡する逆運に会してなお安んずる所を失わざるいわゆる安心立命を与えることが、哲学の当然なる任務とせられるのである。常識がその能力の制限を自覚し、自己以上のものとして哲学の権能を承認するのもこれが為に外ならない。
加之更に一步を進めて考えると、常識が平常何等疑う余地なき当然の事柄として承認する所も、それ等の間に矛盾の存するに由り疑念を挟まれ、進んでその根拠に反省の向けるに及んでは、容易にそれに対する根拠たるものを探求する能はず、或は一応根拠と認めらるるものも、なお進んでその根拠の

根拠を問い合わせ、理由の理由を求むる要求に会しては、直ちに動搖することを免れず、凡てが相対化せられて何等絶対的に確固たるもののが発見せられないようになる。これに由つて、常識の限界が常識に対しても暴露せられるのは必ずしも非常特別の場合に限らない。既に常識が自身の内に矛盾を発見すればそれは動搖を感じるのであり、進んでその認むる所に理由を求めるに及んでは、それは到底越えることの出来ない限界に撞着し、行詰まりに陥ることを免れないものである。哲学は常識の斯かる限界を越え、行詰まりを開けるものとして、常識自らに由り要求せられる。それ故この見地から、哲学は常識の自己否定が産出するものであると云つても差支ない訳である。

この様に考えると哲学は、常識の相対的立場がそれの相対性の故に矛盾に陥り混乱を惹起し、その極自己を否定するに由つて、これを救う絶対的な叡知として要求せられるものといわれる。哲学の発生には、常識の承認し信頼する所が凡て動搖震撼せられ、何等の抛る所なきに至る大疑の逢着せられるとが必要である。その大疑の極まる所一切を否定するものは即ち一切を肯定するもの、凡てを殺すものは即ち凡てを生かすものなる転換の行わるるに由り、哲学の絶対的な立場が生まれるのである。單に常識の延長としては哲学は発生しない。必ず常識の一たび行詰まり否定せられることが哲学の発生に対する機縁となる。哲学が常識から尊敬せられると同時に危険視せられ、哲学者が常人から狂人扱いを受けるゆえんである。ヘーゲルの語を借りて、哲学の世界をこの意味に於て「顛倒せられた世界」と呼ぶことも出来るであろう。しかしながら哲学の絶対的立場が常識の相対的立場に対立し、後者を否定して唯自己のみを肯定するものとして後者の外に立つならば、それは却て相対に対する絶対として自ら相対となり、而も自己の肯定は他の否定に於て成立する為に、却て否定すべき他を自己の外に予想するに

由つて、実は他なくして自己が有ること能わざる相対者たることを実証する。単に直接に他を否定するものは決して絶対たる能わず、自ら相対に止まるのである。いわゆる断常の二見として排せらるる二元相対に陥ることが斯かる抽象的絶対観の運命に外ならない。これを免れるには、却て他を否定することに於て他を肯定するものが自己であり、斯様に他を肯定する自己の否定以外に自己の肯定無きことを覚るにある。即ち有と無とが互に互を媒介し、肯定と否定とが転換せられ、自と他とが回互せられることを必要とするのである。斯くして相対が相対を否定する相対の自己否定が積極的に肯定として絶対であり、相対にして、相対に止まり相対に執わるる所無き、絶対的転換媒介の運動がいわゆる動即静として相対即絶対たるのである。この外に別に絶対なるものの存在することはない。それ故常識の相対を殺すものは常識の外にある哲学の絶対觀ではない。実は相対を殺すものも相対なのであり、寧ろ相対なるが故に、一は他を予想しながら却て他を排除しようとする矛盾に陥るのである。この相対の矛盾に由る自己否定が却て絶対否定の肯定として積極性に転換せられる所に絶対は現前する、というべきである。今まで自己の外に起つた相対に由る否定が、今や自己自身の活動に転ぜられ、否定即肯定の絶対無としての自己が現われるのである。

この様に常識そのものに存する矛盾、それに由る自己否定が、却て絶対否定として即肯定となる転換媒介の運動のみ哲学の絶対的立場に外ならないとするならば、哲学は決して単に常識を殺すものでなく同時にこれを活かすものでなければならぬ。哲学は常識を殺すことに於てそれを活かし、常識は哲学に於て死すると共に生きるのである。一たび顛倒せられた世界は新たなる風光を帶びて再び原の形態を現わす。いわゆる、到得帰来無別事、廬山烟雨浙江潮である。平常心これ道という如く、危機に処して誤

らざるものは平常の心であり、非常も非常にあらず却て平常に過ぎざるに至つて、平常心は平常にして平常にあらず平常以上のものとなる。いわゆる十二時を使ひ得る者にとつては日々これ好日、何れの時か可ならざるあらん、である。常識が哲学に期待する所は斯かる境地に外ならない。それがこれを忌憚しつつも畏敬するゆえんである。常識は自己の内に存する矛盾に動搖せしめられ、自己の力で越えることの出来ない限界を自覺するが故に、危険視しながら哲学に頼ろうとする。哲学が世俗から白眼を以て視られながらなお一種の尊敬を受ける理由である。斯様な関係に於て觀られた哲学は従つて、常識と同じく全く実践的なる知慧でなければならぬ。常識も識と呼ばれるからには知識に属するものに相違無いが、しかし科学の如く何等かの意味に於て当面の実用から離れて知識の為に知識を求める、という意味を全然含まざる、直接に生活の実際と合一せる知識であることを特色とする。それは日常の行動実践を指導して誤る所無き、実際的判断の能力として、徹頭徹尾実際的でなければならぬのである。いやしくも実際から遊離した知識は常識とはいわれない。ところで哲学も常識からそれの転換媒介として要求せられる限りに於ては、常識と同じく実際的なることを必然とする。如何なる人生の転変に処しても誤らず、常識が昏迷に陥る如き危機難局に臨んでも、なお道無きに道を見る底の能力ある知慧にして、始めて哲学であるといわれる。哲学も飽くまで実際を離れず、人生の実践から生れた知慧であると同時に、実践を導く知慧でなければならぬ。実践に役立たぬ知識は哲学とはいわれない。これ哲学が博識と区別せられるゆえんである。禅が見性悟道を第一義とし、教相家の学識を生死の出離に係わりなきものと看做した態度は、常識が哲学に期待する所と相通ずるものがある。ソクラテスが哲学者の儀表と仰がれるのもこの見地からして当然と解せられるであろう。何等特別の学識無きも人生の実際から常識以上の深

き知慧を汲取り、波瀾多き閱歴の間に、運命の転変に左右せられざる信念を獲得した人を、哲学を有する人と称する如きはこの意味に於てである。我々は常識の哲学に対し要求するこの実際性を決して覗過することを許さない。哲学者が単に学識ある者の謂でなく、必ず人生の実際に処して道を誤らざる実践的達識者たることを要するとせられるのは、常識との関係から見て当然の事でなければならぬ。

一

常識と哲学との関係が一応右の如くに考えられるとすれば、哲学は一見單に常識の深められた延長であるかの如くに見えるけれども、斯く觀ることそれ自身が常識の立場に外ならないともいわれるのであつて、哲学は常識の单なる延長であるのではなく、常識の否定即肯定的な轉換が始めて哲学を成立せしめるものなることが、哲学の自覺に属するのである。全然哲学を含まず常識のみに終始する立場からは、両者の関係を具体的に理解することは出来ぬ。絶対否定の轉換に由つて両者が媒介せられるという如き理解は、既にそれ自身が哲学の立場に於てのみ可能なのである。深められた延長は実は单なる延長でなく転換飛躍なのである。常識に比して深いとは、一たび常識が顛倒されることを意味するのになければならぬ。しかしながら斯様に常識を顛倒する立場も、否、常識自らが自己を否定し顛倒することに由つて現前する立場も、再び常識がそれに於て活かされる点から觀れば、常識の延長として見られる理由を有することもまた無視出来ない。いわゆる無事これ貴人などといわれる如く、哲学の絶対的立場も何等常識の日常的立場と対立する所なく、廓然無聖これを莊嚴すべき神聖にして神秘なるものを全然脱却せることが、真に絶対的なるものの証徴というべきである。最大の神秘はいわゆる神秘の無いこ

とでなければならぬ。常識が行詰まりながら通徹すること、換言すれば非常が非常にして而も平常に外ならざることが、最大の不可思議である。不思議はいわゆる非合理にあるのでなく非合理即合理なる絶対合理性にある。更にいえば、平常が平常にして而も実は平常にあらざるに至つて、神秘は極まるといわねばならぬ。矛盾が矛盾にして矛盾でない、否定が否定にして同時に肯定である、という程大なる不思議があるであろうか。而も外から見れば斯かる通徹せる立場も、未だ行詰まらない常識の立場と異なる所は無いのである。否、常識と称せらるるものも、眞にそれが日常に処して誤る所が無く、何等か変通の自由を有するならば、既にそれだけ転換の妙機を含むのである。如何に平常的なる生活といえども、全然同一の経験を繰返すものではない。不斷に変化し毎瞬に新なるものを含むが故に、生活なのである。それ故単に平常に処して誤らざる常識といえども、実は何等かの工夫を経て変通の妙を獲得して居るのでなければならない。常識も無意識に小規模に於て転換の機を含む限り常識として役立つのである。ただ哲学に於ける如くその転換が意識的意図的でなく、直接にして反省を含まないだけである。全く転換を欠くものは常識として実際に通達することも出来ない。この様に考えると、常識と哲学とは一方から見ればさきに述べた如く否定的に対立しその間が断絶せられるのであるけれども、他方から見れば相聯関し相合一するといわれなければならぬ。哲学が常識の延長として認められるのはただに常識の浅見にのみ帰せられるべきものではなく、哲学自身も自らを常識と合一するものと見ることが出来るのでなければ、却て哲学として未熟なることを免れないのである。

果して然らば、初に常識と哲学とを区別し対立せしめたことは、今全く無意味に帰するではないか、という疑問が起ることを免れまい。しかし必ずしもそうではないのである。成程常識と哲学とが合一す

るとすれば、両者は全く区別が無いようにも思われるであろう。しかし合一することは区別せられるものが合一することでなければならぬ。全然同一にして唯一なるものは合一しようは無い。常識と哲学とは区別せられ相対立するが故にこそ却て合一することが出来るのであって、両者が全然同一ならば合一すべき謂われは無いのである。ただ既に常識の内にも哲学があり、哲学の内にも常識があるから、両者は概念上区別せられるに拘らず、事実上全く分離することは出来ない。これが前に述べた相対即絶対の構造に外ならぬ。即とは相対立するものの合一する関係である。唯一同一なるものは即という関係を含むことは出来ない。相対即絶対とは両者に区別が無いという意味ではないこというまでもあるまい。却て相対立するが故に両者の転換媒介が即という語で表わされるのである。否定即肯定といい、有即無といい、同様の関係に外ならない。今や我々は斯かる意味に於て常識即哲学ということが出来なければならぬ筈である。

ところでこの様に対立的に区別せられるものが却て具体的には相合一して相互に転換媒介せられるることは、決して単に観念的に思想するのみで実現せられることは出来ない。单なる観念としては矛盾的に対立するものは飽くまで対立せしめられることを要求するのが、思想の原理としての矛盾律の意味である。矛盾的に対立するものが合一するというのは、静的に固定せられた観念の関係ではなくして、生活に於てはたらく主体の動性に外ならない。常識と哲学との転換媒介も相対にして絶対なる主体のはたらきである。自分が他の絶対否定として他を媒介とし、他が自の媒介として他即自なる如き動態が、始めて観念の矛盾律的固定を破つて、有無相転じ否定即肯定なる関係を成立せしめるのである。これを循環といえば、矛盾を循環に転ずるのが絶対的自己であるといわれるであろう。その循環の内容は单なる思

想でなくして行為であり、知識でなくして実践である。否、常識即哲学として成立つ生活の智慧は、單なる知識でなくして実践と媒介せられたる知識であり、行為に於ける思想なのである。これがさきに述べた哲学の常識と相通ずる実際性に外ならない。それであるから、この様な哲学は飽くまで生活行動に於てのみ実現せられる知慧であつて、実践を離れて語られる思想でなく、行為と独立に成立する知識ではないのである。常識が生活としての知識であると同じ意味に於て、斯かる哲学は生活としての哲学であるといわれるであろう。それであるから、斯かる哲学の觀知は思想体系として概念的に組織せられるものでなく、端的に行動に於て表現せられる外無い。禪の道得というのは棒喝を行ふことでも足りるのである。言辞の葛藤は所詮第二義以下である。生活としての哲学は禪の如きものに窮極する。西洋に於ても神秘主義が一部の人々に由つて哲学の最も深奥なるものと認められるゆえんである。哲学が宗教と相通するのもこの点に於てする。宗教の本質が容易に言表わし難きにせよ、それが相対と絶対との合一の、絶対者に於ける相対者の否定転換に由る自詐、を必ず含まなければならぬことは疑われない。ところでこれは正に我々の見た哲学の本質でもあるのである。ただ宗教は絶対者に対する信頼帰依乃至讃仰感謝の感情を主とし、哲学は觀知に止まることを、一応両者の相違と認めることが出来るであろう。しかし否定転換の飛躍、絶対無の現前とそれへの帰入、という構造は、宗教と哲学とに通ずる実践的信仰態度といわなければならぬ。常識も人生に対する信念を含む限り、この信仰に通ずるのである。それが哲学と合一すると考えられるゆえんである。

三

以上我々は哲学を専ら常識との関係に於て考えた。東洋思想に於ける哲学の意味はこの側面を重んずること、何人も容易に認める所であろう。然るに現在我々の懷く哲学の概念はこれに尽されるとはいわ
れない。若し哲学が單にかくの如き生活としての哲学に止まるとしたならば、哲学史に伝えられた学問としての哲学は如何なるものと解せられるであろうか。生活は直ちに文化でない。それは後者の公共的なるに対する私人的である。私的な生活の知慧としての常識は歴史に伝承せられるものではない。

歴史の内容を成すものは一般に公共的な文化であつて個人の私的生活ではない。哲学史に伝えられる哲学は単に生活としての哲学であることは出来ぬ。哲学も文化の一部としての学問たる意味を有するに由り、始めて公共的な歴史の内容を成すのである。然らば如何にして生活としての哲学は同時に学問としての哲学たる意味を有することが出来るか。西洋に於ける哲学の概念は専ら後の意味を主とするこ
と疑われないが、それは如何にして東洋的な哲学の概念と一緒に帰せられるか。後者に於ては治者の政治思想の外に、今迄述べた如く常識が哲学の媒介となるのであるが、前者に於ては西洋に固有なる科学なるものが哲学の媒介となること、多少でも西洋の哲学史に通ずるもののが直ちに氣附く所でなければならぬ。然らば科学は常識と如何に異なり如何に聯関するか。我々は先づこの点を明にして哲学の二つの意味が如何にして統一せられるかを見ねばならぬ。

常識は既に述べた如く生活と合一せる知識である。しかしながら我々の生活はそれを導く為に、却て單にそれと直接に合一する常識だけでは足りないことを、二つの方面から氣附かせられる。第一に、生

活が我々の肉体的物質的生活の側面に於て充実せられ合理化せられる為には、単に各個人が自己の狭小なる経験に由つて得る断片的なる知識を有するのみでは不足であつて、斯かるものを以てしては自然を支配し生産を効果的ならしめることが出来ない。物質的生産に於て個人が集団的協力を営まなければならぬと同様に、その物質的自然に関する知識に於ても、経験が個人的でなく集団的に綜合せられ、ただに同時代同種族の生産に直接必要なる知識に止まらず、現在の生活には直接関係なき知識も自然の一般的法則を発見する媒介として獲得保存せられ、歴史的に集積せられ組織せられて、知識の体系が建設せられることが必要とする。斯くして、人間は現在の実用を離れて経験を取得するのみならず、知識の為に人為的に経験を配備し、自然に生起せざる条件を実験的に装置して、法則の汎通を期し、更に仮説を導入して法則を統一し、以て自然の全体に亘る知識を整頓組織しようとする。これが常識と独立した自然認識の科学化である。斯かる科学は、その窮極の目的は実用にあるとしても、却て一時実用を離れ実際の必要から独立して、知識の為に知識を求める態度を執ることを要求するのである。常識の係わる所は、この時この所に於けるこの事であるに対し、科学の係わるのは、常に何處にでも繰返される普遍的本質である、といわれる。ところで人間の能力は凡てその自由なる活動を営むことを快とするに由り、知識の為の知識もアリストテレスの讃頌した如き、純粹なる知ることの喜を喚起し、以て科学を発達せしめる。而して科学の斯かる独立が人間の自由なる活動に俟つものである以上、その可能が個人の自由を何等かの形に於て認める政治組織に由つて保証せられることは、東洋に封建政治の永く続いた結果科學の発達を非常に遅延せしめ、西洋に於てギリシャの民主政治と共に夙く科学の発達を見た、理由を推測せしめるに足りるであろう。しかし更に自然科学の場合に於てよりも一層密接なる科学と政治との関

係は、政治学法律学等の如き歴史的文化科学が立民政治の下に於て始めて十分なる発達を遂げ得る事に示される。常識は生産生活の必要に促されて自然科学にまで自己を発展させる傾向を含むものであるが、それにも倍して、生活の必要上、それの主たる内容となる所の人間知を、組織的なる社会知にまで発展せしめることが必要でなければならぬ。これが常識の科学を要求する第二の側面である。もと人間に關する知識が主として人と人との關係に就いての知識を意味するのであるから、それが生産に於ける人間の協力や統制に伴う社会關係の発達と共に、具体的なる人間知が社会知にまで発展し、社会組織の歴史的由來、その統制の方法、そこに発達する公共的文化の構造、等が単に個人中心的現在本位の常識の枠を破つて、歴史社会の文化科学にまで発展することは当然である。東洋に於ても法律政治の学は既に常識を越えて発達した。治者階級の常識は寧ろ必ず何等かの程度に於て斯かる學問的知識を含んだものと云つてよからう。しかしそれが治者の自己中心的な統治目的に専ら支配せられる間は、寧ろ技術的であつて科学的とはいわれないから、その限り未だ完全に常識の段階を脱しなかつたというべきである。それが真に科学となるのは立民的自治に於て、社会の政治的組織、法律的秩序が当面の実用から離れて自由研究に委ねられた時に於てであった。ギリシャの政治学はギリシャ民主政治の産んだ果実であつたといわれる。ギリシャ人は自然に於けると同様の永遠なる形相を、国家の秩序に發見しようとしたのである。更にローマの法律思想がローマ人の自由獲得、ローマ政治の民主化に伴つて発達したものであることは周知の通りである。常識の個人的私生活的立場は立民政治の公共的立場に於てその枠を破られ、社会的生活の歴史的文化科学にまで発展せしめられる。自然科学と歴史科学との両方面に亘り、一般に科学が政治的自由の產物であることはこれに由つて推定せられる。斯様に科学が西洋立民主義の

所産なることは、ただに古代のみならず近世に於てもまた同様である。東洋の科学が常識の段階を十分に脱し得なかつたことは、立民政治の欠如に因すると云つて誤ではないと思う。科学は常識の実際性から解放せられた自由精神の產物である。日常的实用に間に合う因習伝統に反対しても、眞実なるものを求めよう、という精神なくして、科学の発達は庶幾せられない。現実の経験に於て実証せられるものは、縱々^{などい}我々の先入見と異なるも自由に承認し、それに反するものは如何に神学的宗教信条と形而上学的概念とに支持せらるるもこれを敢然として斥けるという実証的精神と、実証的事実は法則に支配せられ一般に存在は道理をもつと信ずる合理的精神とは、科学の二大支柱であるが、これは畢竟^{ひつきょう}自由精神に伴つて始めて發揮せられるものである。

斯様に科学は常識の特色たる知識と実践との直接なる合一を破つて、知識を知識の為に自由に发展せしめんとする自由精神に伴うことに依り始めて発達するものであるから、常識と同じく実際性を特色とする哲学も、科学が常識の分裂に由つて発達する限り、常識と同様に科学と対立することを免れないようと思われる。然るに他方から考へると、哲学は常識の陥る矛盾とその自己否定とに由つて発生するものであつた。その点から見れば、哲学も常識と対立すること科學と同様であつて、科学が常識の分裂に因り発達する如く、哲学も常識の分裂に因り発達するといわれる。ただ科学の機縁となる場合には常識は知識と実践との分裂を経験するのであり、哲学の機縁となる場合には常識は知識そのものの分裂を経験することが、一見両者の相違をなす如く見える。しかし仔細に考へると、実は常識の知識と実践とが分裂するのも、常識の知識そのものが矛盾に由つてその統一を失うことから起るのであって、若し知識としての統一が完全に保たれるならば、実践がそれから逸脱すべき理由は無い。仮令^{たゞい}逸脱が起つてもそ

れは実践の過失非違として匡正せらるべく、決してそれが一般的に常識の分裂を発生する理由とはならないのである。実践の逸脱はそれを導くべき知識が既に効力を失墜して新しき知識を要求し、後者に従つて実践が起つた為に前者から逸脱する結果となるのである。実は既にそこに知識そのものの矛盾が発生して居るのでなければならない。従つて科学の発生に因由となる常識の分裂は、同時に哲学の発生にも因由となるものに外ならない。ところで哲学の因由となる常識の知識としての分裂は、前に詳説した通り知識の矛盾である。然るに常識そのものは飽くまで実際的なものであるから、その矛盾というのも単に実際的に矛盾するだけのものに止まり、眞に論理的に相容れない矛盾であるかどうかは直ちにわからない。これを裏返していえば、常識の実際的立場で矛盾が無いからといって、それで論理的にも矛盾が無いかどうか、即ち、それだけ引離せば矛盾が無いよう見える知識が、その論理的帰結にまで降つて考えても果してなお矛盾が無いかどうかは、到底常識の立場で決せられるものではないのである。^蓋し常識的知識はさきに特色附けたように、飽くまでも実際と結附くものであるから、それは科学に於ける如く論理的に意味が規定せられた概念の正確なる関係を備えず、概念を媒介とする理由帰結の推論的組織を有しないのである。常に実際の必要に従つて動く知識に、厳密な意味で論理は適用せられない。従つて常識の矛盾というのは極めて表面的なものに止まり、論理的な意味で相容れない矛盾といふものは、実は常識の立場では語ることが出来ないのである。果して然らば常識が哲学に発展すべき因由となるその矛盾なるものは、実は常識そのものの立場では確定せられないのであつて、常識がそなればならぬ。これに由り哲学が常識の矛盾にその発生の由来を有するというのは、実は厳密には科学

の矛盾に由来するということに変更せられなければならぬのである。斯くして常識から哲学が発達する過程には、厳密には中間に科学が媒介として介在することが認められる筈である。科学が介入することなくしては、哲学は常識と直接に融通して、十分明確に対立性を顕わすことが出来ない。単なる生活としての哲学は個人的私生活に属し、公共的に何人もがそれを学ぶことが出来る學問性をもつことがないのである。然るに前に述べた如く、真に具体的に合一するものは却て半面に明確なる対立を有しなければならぬ。直接に相融通するものは実はその合一を具体的ならしめることが出来ないのである。然ならば哲学が真に具体的に常識と媒介せられるには、科学の介在により両者が一たび明確に対立せしめられることが必要な筈である。科学は哲学と常識とを分つと同時に繋ぐ。科学に由つて矛盾が徹底せられなければ哲学の矛盾即統一は具体化せられない。學問を有せざる單なる生活に止まる所の哲学は、哲学としての意義を十分に發揮する能わざるものと認められなければならない。

しかしながら科学に由つて常識と隔てられた哲学は如何にしてそれの要件たる実際性を回復するこ~~SAMPLE SHEET~~とが出来るか。常識と共有する所の哲学の特色たる、知識と実践との合一は、実際性を否定した科学の介入に由つて見失われはしないのか。科学が常識と哲学とを分つと同時に繋ぐというのは如何なる意味であるか。常識が哲学の発生を促す機縁となつた矛盾は、矛盾無き知識の体系たることをその目標とする科学に於ては排除せられる筈ではないか。果して然らば知識は科学に窮屈するので、その外に哲学の如き学問が存すべき理由は無くはないか。學問としての哲学とは科学が再び実践と媒介せられた統一に外ならぬのではないか。それは科学の社会的実践に応用せられたものに過ぎないではないか。斯様な疑問は今や我々の当面せしめられざるを得ない所となる。

四

科学が常識から発展するのはさきに見た如く、常識の含む矛盾を解除する為にそれが実際生活と直接に合一する関係から解放して、知識を表面の現象から本質的なるものへ深め、現象的に矛盾するものも本質的には矛盾の無い統一を形造る、斯かる本質を認識するのが理論の任務である、とすることに依るのである。それ故科学も哲学と一致する所を常識に対して示すのであって、事實上哲学は久しく科学の最も一般的なる理論に外ならないと考えられ、存在の最も普遍的なる本質を認識するものとして普遍科学と称せられたのである。しかし意外にも常識の矛盾を解除すべき筈の科学は、それ自ら如何にしても解除する能わざる矛盾に纏綿せられるのである。カントの批判哲学の功績の一つはこれを明にしたことにある。肯定と否定との相矛盾する二命題が同時に相当の論拠を以て主張せられるいわゆる二律背反なるものは、即ち斯かる矛盾に外ならない。^{しかし}而してカントがその時代の科学的認識の陥る二律背反として挙げたものよりも一層深刻なる矛盾を、今日の科学は現に示すのである。例えばカントが自然の空間的時間的構造に関して指摘したに止まるいわゆる数学的二律背反は、今日では数学そのものの対象として集合の無限連続に属するものとして、いわゆる数学の基礎危機を発生せしめて居る。無限集合に於ては部分と全体とが等値であるとか、連続は一方に於て要素の集合と考えることが数学の精密思考法にとつて必然なるに拘らず、ラッセルなどの思惟した如く極限の論理でそれが貫徹せられるものでなく、彼が論駁したベルグソンの直観主義と軌を一にする如き数学の直観主義が、連続を以て要素の集合に帰する能わざる自由生成の媒介と考えることを必要とするとか、いう如きいわゆる集合論の逆説なる

ものは、曾て学の模範と目された数学を二律背反の矛盾に悩ましめて居るのである。物理学に於てはアインスタインの相対性理論は、それぞれ独立にして相対立すると考えられる空間と時間とが、その測定に於ては却て互に融合して分離する能わず、ただ両者の聯合たるいわゆる「世界」のみが物理学の認識に入り来るという矛盾を暴露し、更に新量子論に於ては從来物理学の認識の支柱と認められた因果律が制限を受け、要素的精密を否定せられて統計的大量効果を意味するに止まると認められるに至つた。微視的見地から、電子の如き物質の終極要素たる微粒子の位置を観測するのに必要とせられる光のエネルギーは、それの運動状態を攪乱するに由り、物質運動の記述に必要な位置と速度とが同時に精密には測定せられない、ということを主張するハイゼンベルクの不確定性原理に由り、物理学的世界の因果的構造は重大なる否定的制限を加えられ、他方に於て要素的精密さを有する因果を要求する巨視的見地と対立する。而して斯く観測が観測せらるべき系に攪乱を与えると、いうことに因由する不確定性は、認識が単に静止固定せる対象の模写でなく、対象とそれに対する認識手段との媒介的統一の展開に外ならざることを示す点に、極めて重要な意義を示す。認識に参加する対象と観測装置とが要素的に分たれるものでなく、対立的に統一せられて否定即肯定的な媒介の動態を形造るということは、既に連続の統一にも存した媒介的全体性に由来するのである。この全体性は生理学生物学に於て表面に現われ、一般に有機体の認識は一方に理化学的精密分析を要求すると共に、他方有機体が決して單に部分の集積として認識せられるものでなく、常に部分に先づ全体の統一を予想して始めて有機体として認識せられるという全体性（全機性）の原理を要求し、要素そのものが同時に全体であるという矛盾を含むのである。生物の進化理論が一方に於て統計的数量的精密関係を示すと共に、他方に於て常に突然変異の不確

定偶然性を予想しなければならぬのも明白なる二律背反であろう。更にこの様な全体の不確定的自由は心理学の形態説に於て徹底せられ、斯学の要素的見地、法則的機能関係の要求に対立する。今日の心理学の原理的問題が形態説と要素論との綜合に集中せられて居るのは、この二律背反を解く為と解せられる。しかしその結果が折衷に終り真に徹底的に二律背反を解くことが出来ないのは、寧ろそれが解除するを許さないものであることを思わしめる。而して心理学の要素分析は精神現象を客觀として認識する為に要求せられる見地であり、それに対し全体の自由なるものは主觀としての精神に属するものであるから、両者の対立しながら共に精神の規定に属するという矛盾は、本来主觀と客觀とが対立しながら相媒介し、相互に相即相入して分界せられないことを意味する。心理学に於て、認識が主觀の客觀を模写する関係として理解する能わざることは最も明白に顯現せられる。物理学の不確定性原理に既に潜在するというべき主觀客觀の否定的媒介は、心理学に於て表面化せられるのである。有機体に於てはこの媒介が生命の内容に外から投入前提せられながら内から自覺せられるに至らない。精神に至つてこの自覺が顯現せられ、主觀客觀の媒介的統一、見られる存在と見る作用との対立的統一が表面化する。^{しかし}而して心理学はなお見られる存在としての側面を主とし、見られた精神の學たるのであるが、反対に見る精神の作用を主とし、精神の見た精神、即ち表現に於ける精神の了解の立場に進むに及び、歴史的文化の認識に入る。これは自然科学に於て抽象せられ否定せられた主体が、自己の所行を自覺する立場の認識としての歴史的文化科学に外ならない。斯かる主觀は客觀に自己を没することに依り却て客体を主体化する実践者として、物質的自然の再生産を目指す経済を基底とし、それに相關的なる人間の社会的関係を基礎としながら、却てこの制約を自由の媒介に転ずる為に、政治、法律をその直接なる所産として發展

せしめる。更にこれ等の社会的生活の表現が、原理的に反省せられ、歴史の相対性に制約せられながら相対性の否定的自覚に於て絶対と媒介せられ、相対即絶対の自覚に入るに及び、倫理宗教芸術等の文化並に哲学そのものの歴史的自覚を成立せしめる。これ等の歴史的文化の認識は、有ると共に作らるる、精神の表現に固有なる矛盾を含むのは必然であつて、一方社会的基底の方向に於て自然科学に通ずる客観的認識を発展せしめると同時に、他方歴史的認識に於て主体の自由なる表現的創造の跡を自覚するという方法上の二律背反を示す。それは存在の構造 자체に由来するものであるから除くことが出来ない。

法則科学の普遍性と歴史の個別性とは、単に方法の二元性に止まるものでなく、認識そのものの二律背反を形造る。その由来する所は存在自身の自己矛盾に外ならない。歴史が自然の如く完結的統一を意味するものでなく、不断の革新を含む運動の過程たるもの、斯かる矛盾がそれの根本構造に属するからである。その統一はただ、相対の自己否定的運動が、即ち絶対否定の動即静である、ということに依る外無い。しかしこの相対即絶対の自覚は最早歴史学に属するものでなく哲学に属する。歴史に至つて蔽うことの出来ない、有る所の客觀と作る所の主觀との対立的聯閥の二律背反が、今や主觀と客觀との否定的媒介に於て主体的に統一せられ実践的に止揚せられるのである。この実践的媒介に於てのみ矛盾は却て矛盾のままに媒介統一せられ、矛盾を超ゆる統一は存在でなくして絶対否定作用の純動即静に外ならざることが実現せられる。対象的認識の必然に陥る二律背反に因つて、客觀的対象は無に帰する、その対象の無を通して対象の束縛から解放せられた作用の自由が、カントのいわゆる先驗論的自由であつて、それが実践的自由を可能ならしめるのである。これは正に常識の矛盾を絶対否定的に超越するものとして初に考えた哲学が、今や科学を媒介として論理的に自己を具体化するものに外ならない。科

学が相対の認識なるに拘らず思惟の本性上必然に無制約的絶対の認識たらんと要求する結果は、遡くべからざる二律背反の矛盾に陥ることを明にし、その自己矛盾の故に絶対認識の能力としての理性の論理を仮象の論理の意味に於て弁証法と名けた所の、カントの批判を徹底することに依つて逆転し、存在する客觀の認識を作為行動する実践の主体に媒介して、主客の転換に由り有と無、肯定と否定、を絶対否定の動即静に於て相通せしめたところのヘーゲルの弁証法は、矛盾こそ絶対の根本原理であるとするものである。科学の論理的体系性がその二律背反、方法的矛盾に由つて哲学の知即行を媒介するが故に、哲学は弁証法の論理をもつ學問となるのである。而もそれは同時にそれの知即行に由つて、常識と相通する生活としての哲学の性格を依然として保有する。學問と生活とが今や哲学に於て対立しながら統一せられるのである。科学は前に見た如く常識の実際性から解放せられることに依つて発達したものであるから、それが再び生活の実際と結合せられる場合には、科学と生活とに共通する技術に由つて結合せられる外無い。いわゆる科学理論の應用とはこれをいうのである。然るに科学の体系に内在する二律背反と方法的矛盾とは、科学そのものの否定的運動を発生せしめる。この否定的運動の必然を自覺し、科學そのものの自己矛盾を、相対の自己否定として即絶対の肯定に転ずることが、正に科学そのものの哲学への發展に外ならない。前に常識と哲学との相即を見た我々は、今や科学と哲学との相即を認め、科學即哲学といわなければならぬ。その転換の過程は歴史に於ける実践に存する。これはいわゆる應用の如き偶然的結合の關係でなく、科学そのものの自己否定的内面的運動が、絶対否定的主体的に自覺せられ、知即行として哲学に發展するのである。哲学に至つて、認識が模写でなく又表現でなくして媒介なことが明白であろう。模写論の客觀主義と表現の主觀主義とは主觀と客觀とが独立的に対立しながら

却て交^{かえつ}互的に相予想し、能限定即所限定として交互に転換する関係に立つ、ことを具体的に認める媒介論に止揚せられなければならぬ。

我々は前に科学の延長、その基礎的普遍化、として哲学を解する立場の由来を見た。批判哲学はこの連續的延長の思想を打破して、科学の限界を自覺せしめた点に独特の意味を有する。しかし同時に絶対認識としての哲学を断念するの余儀無き帰結に陥つた。知識と実践とが分離し、前者は科学に終始して哲学は後者に配当せられる外無かつたのである。しかし知識を離れ科学を媒介とせざる実践は単なる主觀的良心的行為に止まり、客觀的倫理的、從^つて政治的歴史的な実践に係わることが出来ない。然るに今や弁証法的理性の哲学に至つて、科学の否定即肯定として、科学を活かすことに於て科学を殺し、その矛盾を否定から肯定に転ずることに依つて科学の主觀から主体に転じ、科学そのものと合一することに依つて却て自由に科学を使い得る哲学が現われた。科学のそれに固着する普遍を、その相互の矛盾撞着に於て絶対的に否定して、直下に現実と媒介し、科学の固定する道理以上の、道理無き道理を捉えるのが哲学である。斯かる哲学は科学の歴史的發展に即し、これを実踐に媒介して歴史的相對的な世界觀を立しながら、主体的にこれを相對即絶対化することに由り哲学の絶対性を保持する。而してこの様な世界觀は實際生活に媒介せられたものとしておのづから常識に通じそれに入込む。常識にはもと境界は無いのであるから、科学も常識化せられ、學問としての哲学もまた常識化せられるのである。しかしこれは科学の媒介を経ざる哲学が常識と直接合一するのとは同じでない。禅の神秘主義は常識の頼る所の知識思想の限界を打破する為にいわゆる公案なるものを用いる。公案は一般的に云つて知識思想を行詰まらせ同時にこれを打開する為の矛盾命題と解してよからう。しかしその矛盾命題は單に知識否定

の用に供せられる目的を有するに止まるから、如何に荒誕な逆説であつても差支無い。否却かきて荒誕であればある程、それに捉われることがないから一層よいとさえいわれる。従つて見性すれば公案は全然無用の廃物に帰するのである。その意味に於て公案は全く知識として活かさることなき背理逆説に止まり、決して悟道の内に復活せしめられることを必然とするものではない。これ見性悟道が知識を否定する一方であつてこれを媒介とすることに依りそれ自ら知識たる意味を有するものでないゆえんである。さきにも述べた如く悟の境地を道い得るには極端で足りるのであって、言辞を用うるもいわゆる因言遺言という如き否定的目的を有するに過ぎない。その境地の風光を積極的に伝えるものは芸術的象徴としての偽頌の類である。西洋に於ける神秘主義もいわゆる否定神学の形をとるを常とする。それは思想と言辭とを絶する無の境地に係わるからである。しかしかくの如き神秘的直観の立場はそれだけでは公共的な知識と媒介せられず、いわゆる父子相承の秘伝的立場を脱しない。それは秘義に属し学問とならず、宗教の立場から客観的文化を否定する方に偏してこれを肯定する歴史的実践と分離し、国家の如き客観的制度に参加して政治に係わる途を杜絶する。インドの民族が歴史的に久しく衰退したゆえんも、一は斯かる神秘思想の影響に因る所があるであろう。これは今日の歴史的危機を救うに足りない。ヘーゲルがシェリングの絶対無差別の知的直観を極力排斥して哲学の論理性を強調したことは、無視すべきからざる意味を有する。神秘主義は単に学問としての哲学を不可能ならしむるのみならず、実践のもつべき客観的歴史性を逸せしめることを免れないからである。しかるに科学の二律背反は正にいわゆる現成公案たる意味を有する。それは現実にして矛盾を含み、知識と悟性的思惟とを打倒する力を有するのである。しかし而も哲学がその否定的肯定として論理的にこれを媒介とするときは、哲学の実践的知識はそ

の科学的知識と相即し、後者を活かすことに於てこれを殺すもの、他意なく純一にそれに自己を委ねてそれと合一することに由り、却てその魂となり主となつて自由にこれを用い得るもの、となる。それが歴史的実践の行即知たるゆえんである。ここに今迄出会つた普遍科学としての哲学にも、科学批判としての批判哲学にも認められなかつた所の、科学の哲学に対する密接なる自己媒介の必然関係が生ずる。即ちそれ等に於ては科学が哲学に予想せられるけれども、その関係は外面的であつて、或は單なる延長の為に或は單なる形式の為に、前提せられるに止まり、内容的に科学が哲学の内に媒介として入込み世界観の否定的質料となる如き内面的関係は無い。然るに科学の絶対否定としての哲学に於ては、哲学の内容は科学の内容と即し、後者の歴史的進歩が前者の世界観を規定するのである。これに由つて科学が哲学の実践的知識に媒介せられ、高き意味に於て技術化せられ實際生活に統一せられる。それが学問即生活たる哲学の具体的立場である。その論理としての弁証法は、論理にして而も論理の否定を媒介とするものである。これに由つて直觀は論理の自己疎外として却て論理の媒介となる。直觀と論理とが実践的に媒介せられる行即知が弁証法の論理に外ならない。弁証法を形造る三段階中第三の段階としての総合は、実は第一段階の定立及び第二段階の反定立と同じ意味に於て論理に属するのではなく、論理と、論理の否定としての直觀との、実践に於て媒介せられる知即行に属するのである。即ちそれは主体の媒介活動を意味する。思想知識の対象規定としては定立反定立の二つの外に第三の規定は無い。ただ客観的対象の主体化せられる実践に於て、定立反定立の矛盾が却て対象の無を通じて主体的作用の自由に於ける統一に綜合せられるのである。哲学は斯かる意味に於て科学の客観的認識を歴史的実践に媒介する行即知に外ならない。

日本精神は曾てその祭政一致思想の直接態に於て仏教の宗教的絶対思想と儒教の政治的相対思想とを媒介し、兩者を包容して東洋思想の統一点となつた。しかしそれは全く直接的なる相対絶対合一の立場であるから、宛も常識即哲学の立場に相当するものであつて、それだけでは歴史の現段階に応ずる哲学たるに足りない。今日の歴史的危機は到底常識の能く脱せしむる所ではない。ただ徹底的な科学的認識を媒介として自由にこれを使い得る哲学のみ、これを超克する途を見出すことが出来るであらう。

日本民族の歴史的使命を自覺した現在から将来に向つての日本哲学は、具体的なる歴史社会の科学的認識を、否定即肯定的に媒介とする実践即知識としての斯かる哲学でなければならぬ。端的にいえば科学を公案として用いると同時に、これを論理的に否定即肯定して自己の内容にまで化する所の、絶対否定の禅的行即知でなければならぬ。私はこれが東洋思想と西洋思想との実践的媒介として當來の日本哲学の立場たる意味を有するものと信ずる。それは明に神秘的非合理主義でなくして反対に絶対合理主義である。しかしその絶対合理主義の理性は、科学と否定的に統一せられ主体的自由に於てこれを用い得る絶対否定の原理であるから、いわゆる合理主義乃至科学主義とは一見相近くして而も相距ること千里ともいわるべきものであらう。

(十一、八、六)

〔一九三七年『哲学と科学との間』に収録〕

田辺元略年譜+著作リスト

- 一八八五（明治18）年 0歳 東京府神田区猿楽町に生まれる。
- 一九〇一（明治34）年 16歳 第一高等学校理科に入学。
- 一九〇四（明治37）年 19歳 東京帝国大学理科大学数学科に入学。
- 一九〇五（明治38）年 20歳 文科大学哲学科に転科。
- 一九〇八（明治41）年 23歳 東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。卒業論文「知識学上に於ける断定の本質」。
- 一九一一（明治44）年 26歳 東京帝国大学大学院に入学。認識論専攻。
- 一九一三（大正2）年 28歳 東北帝国大学理科大学講師に就任。科学概論担当。
- 一九一六（大正5）年 31歳 芦野ちよと結婚。
- 一九一八（大正7）年 33歳 京都帝国大学より文学博士の学位を受ける（学位論文「数理哲学研究」、主査西田幾多郎）。

- 一九一九（大正 8）年 34 歳
京都帝国大学文学部助教授に就任。
- 一九二三（大正 11）年 37 歳
文部省在外研究員として渡欧。
ベルリンからライブルクへ移りフッサールのもとで学ぶ。
ハイデッガーと交わる。
- 一九二三（大正 12）年 38 歳
ロンドン、パリを経て帰国の途につく。
- 一九二五（大正 14）年 40 歳
腸閉塞のため手術を受ける。
- 一九二七（昭和 2）年 42 歳
京都帝国大学文学部哲学哲学史第一講座教授に就任。
- 一九二八（昭和 3）年 43 歳
西田幾多郎が京都帝国大学を停年退官。
- 一九三〇（昭和 5）年 45 歳
京都帝国大学文学部哲學哲學史第一講座教授に就任。
- 一九三五（昭和 10）年 50 歳
文部省の教学刷新評議会委員を務める。
西田幾多郎批判の論文（「西田先生の教を仰ぐ」）を発表。
- 一九三七（昭和 12）年 52 歳
文部省教学局の参与を務める。
- 一九四五（昭和 20）年 60 歳
文部省の教学刷新評議会委員を務める。
- 一九四七（昭和 22）年 62 歳
京都帝国大学を停年退官。群馬県長野原町北軽井沢に転居。
学士院会員となる。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

●一九五〇（昭和25）年 65歳

文化勲章受章。

●一九五一（昭和26）年 66歳

妻ちよ歿（55歳）。

この年から十年間、自宅にて野上弥生子に哲学講義をする。

●一九五七（昭和32）年 72歳

フライブルク大学創立五百周年祭にあたり名誉博士の称号を贈られる。
(推薦者ハイデッガー、オイゲン・フィンク)。

●一九六一（昭和36）年 76歳

脳軟化症のため群馬大学病院で闘病生活。

●一九六二（昭和37）年 77歳

四月二十九日歿。

主要単行本

■一九一五（大正4）年 30歳

『最近の自然科学』（岩波書店）。

■一九一六（大正5）年 31歳

アンリ・ボアンカレ著『科学の価値』翻訳（岩波書店）。

■一九一八（大正7）年 33歳

『科学概論』（岩波書店）。

■一九二四（大正13）年 39歳

『カントの目的論』（岩波書店）。

■一九二五（大正14）年 40歳

（岩波書店）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

『数理哲学研究』（岩波書店。西田幾多郎による「序」）。

■一九二八（昭和3）年 43歳
マクス・プランク著『物理学的世界像の統一』翻訳（岩波書店）。

■一九三二（昭和7）年 47歳
『ヘーゲル哲学と弁証法』（岩波書店）。

■一九三三（昭和8）年 48歳
『哲学通論』（岩波書店）。

■一九三七（昭和12）年 52歳
『哲学と科学との間』（岩波書店）。

■一九三九（昭和14）年 54歳
『正法眼藏の哲学私観』（岩波書店）。

■一九四〇（昭和15）年 55歳
『歴史的現実』（岩波書店）。

■一九四一（昭和16）年 56歳
『哲学の方向』（日黒書店）。

■一九四六（昭和21）年 61歳
『懺悔道としての哲学』（岩波書店）。

■一九四七（昭和22）年 62歳
『政治哲学の急務』（筑摩書房）。

■一九四八（昭和23）年 63歳
『種の論理の弁証法』（秋田屋）。

■一九四九（昭和24）年 64歳
『キリスト教の弁証』（筑摩書房）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

- 『哲学入門——哲学の根本問題』（筑摩書房）。
- 『哲学入門——補説第一 歴史哲学政治哲学』（筑摩書房）。
- 一九五〇（昭和25）年 65歳
- 『哲学入門——補説第二 科学哲学認識論』（筑摩書房）。
- 一九五一（昭和26）年 66歳
- 『ヴァレリーの芸術哲学』（筑摩書房）。
- 一九五二（昭和27）年 67歳
- 『哲学入門——補説第三 宗教哲学・倫理学』（筑摩書房）。
- 一九五四（昭和29）年 69歳
- 『数理の歴史主義展開』（筑摩書房）。
- 一九五五（昭和30）年 70歳
- 『理論物理学新方法論提説』（筑摩書房）。
- 『相対性理論の弁証法』（筑摩書房）。
- 一九六一（昭和36）年 76歳
- 『マルメ覚書』（筑摩書房）。

主要論文

- 一九一〇（明治43）年 25歳
「措定判断に就て」（『哲学雑誌』）。
- 一九一二（明治45・大正1）年 27歳
「相対性の問題」（『哲学雑誌』）。
「カントと自然科学」（『哲学雑誌』）。
- 一九一三（大正2）年 28歳

「ランク氏『物理学的世界形象の統一』」（『哲学雑誌』）。

「相対性原理に対するナトルプ氏の批評」（『哲学雑誌』）。

「ボアンカレ氏『空間と時間』」（『哲学雑誌』）。

■ 一九一四（大正3）年 29歳

「認識論に於ける論理主義の限界——マールブルヒ派とフライブルヒ派の批評」（『哲学雑誌』）。

■ 一九一五（大正4）年 30歳

「自然科学対精神科学・文化科学」（『心理研究』）。

■ 一九一六（大正5）年 31歳

「連續・微分・無限」（『哲学雑誌』）。

■ 「普遍に就いて」（『哲学研究』）。

「負数及び虚数」（上）（『哲学雑誌』）。

■ 一九一七（大正6）年 32歳

「負数及び虚数」（下）（『哲学雑誌』）。

「数理の認識」（『哲学研究』）。

「変数及び函数」（『哲学雑誌』）。

「道徳的自由」（『思潮』）。

「時間論」（『哲学研究』）。

■ 一九一八（大正7）年 33歳

「再び道徳的自由に就いて」（『思潮』）。

「數理哲学研究」（京都帝国大学学位論文）。

「幾何学の論理的基礎」（『哲学雑誌』）。

「独逸唯心論に於ける哲学的認識の問題」（『思潮』）。

「無限の世界」（『思潮』）。

「カントの自由論に就いて」（『思潮』）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- 「ライプニッセン哲学の意義」（『哲学研究』）。
- 一九一九（大正8）年 34歳
「理想主義」（『信濃教育』）。
- 「意識一般」に就いて」（『哲学雑誌』）。
- 「認識主観の問題」（一）（『哲学研究』）。
- 一九二〇（大正9）年 35歳
「認識主観の問題」（二）（『哲学研究』）。
- 「自然科学と文化科学」（『信濃教育』）。
- 一九二一（大正10）年 36歳
「認識主観の問題」（三一五、未完）（『哲学研究』）。
- 一九二二（大正11年） 37歳
「歴史の認識に就いて」（『史林』）。
- 「実在の無限連続性」（『思想』）。
- 「文化の概念」（『改造』）。
- 一九二四（大正13）年 39歳
「先驗演繹論に於ける直觀と思惟との關係」（『思想』）。
- 「カントの目的論」（『哲学研究』）。
- 「現象学に於ける新しき転向——ハイデッガートの生の現象学」（『思想』）。
- 一九二五（大正14）年 40歳
「認識論と現象学」（『講座』）。
- 「直觀知と物自体」（上）（『哲学研究』）。
- 「直觀知と物自体」（中）（『哲学研究』）。
- 「ラスクの論理」（『思想』）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

■一九二六（大正15・昭和1）年 41歳

「直觀知と物自体」（下）（『哲学研究』）。

■一九二七（昭和2）年 42歳

「批判的方法に於ける循環論に就いて」（『思想』）。

「反省作用」（『得能博士還暦記念 哲學論文集』）。

「弁証法の論理」（一—三）（『哲学研究』）。

■一九二八（昭和3）年 43歳

「歴史の認識に於ける概念の機能」（『史林』）。

「弁証法の論理」（四、五）（『哲学研究』）。

「儒教的存在論に就いて」（『支那學論叢』）。

高瀬博士還暦記念

■一九二九（昭和4）年 44歳

「弁証法の論理」（六）（『哲学研究』）。

「行為と歴史、及び弁証法のこれに対する關係」（『思想』）。

■一九三〇（昭和5）年 45歳

「所謂「科学の階級性」に就いて」（『改造』）。

「西田先生の教を仰ぐ」（『哲学研究』）。

「道德の主体と弁証法的自由」（『思想』）。

■一九三一（昭和6）年 46歳

「新物理学的世界像の意義」（岩波講座『物理学及び化学生』）。

「綜合と超越」（『朝永博士還暦記念 哲學論文集』）。

「ヘーゲルに於ける理性的と現実的一致」（『ヘーゲルとヘーゲル主義』）。

「ヘーゲル哲学と絶対弁証法」（『思想』）。

「人間学の立場」（『理想』）。

「ヘーゲル判断論の理解」（『哲学雑誌』）。

「ヘーゲル判断論の理解」（『哲学雑誌』）。

「ヘーゲルの絶対観念論」（『哲学研究』）。

■一九三二（昭和7）年 47歳

「哲学通論」（岩波講座『哲学』）。

「図式「時間」から図式「世界」へ」（『哲学研究』）。

■一九三三（昭和8）年 48歳

「アララギの伝統」（『アララギ』）。

「哲学への通路」（『思想』）。

「危機の哲学か哲学の危機か」（『朝日新聞』）。

■一九三四（昭和9）年 49歳

「数学ト哲学トノ関係」（岩波講座『数学』）。

「社会存在の論理」（上、中）（『哲学研究』）。

■一九三五（昭和10）年 50歳

「社会存在の論理」（下）（『哲学研究』）。

「種の論理と世界図式」（『哲学研究』）。

「存在論の第三段階」（『理想』）。

■一九三六（昭和11）年 51歳

「ヒューマニズムに就いて」（『思想』）。

「常識・科学・哲学——當來の日本哲学の方向」（『日本評論』）。

■一九三七（昭和12）年 52歳

「科学政策の矛盾」（『改造』）。

「論理の社會存在論的構造」（『哲学研究』）。

■一九三八（昭和13）年 53歳

「世界觀と世界像」（『科学』）。

「蓑田氏及び松田氏の批判に答ふ」（『原理日本』）。

「量子論の哲学的意味」（『思想』）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

「科学性の成立」（『文藝春秋』）
「種の論理に対する批評に答ふ」（『思想』）。

「種の論理の意味を明にする」（『哲学研究』）。

「カントからヘーゲルへの論理」（『哲学及び宗教と其歴史』）。

「実存哲学の限界」（『哲学雑誌』）。

「永平正法眼藏の哲学」（『哲学研究』）。

「物理学と哲学」（岩波講座『物理学』13）。

「国家的存在の論理」（『哲学研究』）。

「永遠・歴史・行為」（『哲学研究』）。

「倫理と論理」（岩波講座『倫理学』4）。

「一九四〇」（昭和15）年 55歳

「國家の道義性」（中央公論）。

「思想報國の道」（改造）。

「実存概念の發展」（未完）（『哲学研究』）。

「日本民主主義の確立」（潮流）。

「社会党と共産党との間」（改造）。

「種の論理の実践的構造」（『哲学季刊』）。

「一九四六」（昭和21）年 61歳

「知識階級現在の任務」（潮流）。

「プラトニズムの自己超越と福音信仰」（展望）。

波多野精一先生献呈論文集』）。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

「キリスト教とマルクシズムと日本仏教」（『展望』）。

一九四八（昭和23）年 63歳

「キリスト教の弁証序論」（『展望』）。

「局所的微視的——現代的思考の特徴」（『展望』）。

一九四九（昭和24）年 64歳

「古典力学の弁証法」（『基礎科学』）。

「力学の哲学」について（『展望』）。

一九五〇（昭和25）年 65歳

「科学と哲学と宗教」（筑摩書房『哲学講座』4）。

「ヴァレリーの詩「若きパルク」」（『展望』）。

一九五二（昭和27）年 67歳

「再武装」に関する意見・批判・希望（『世界』）。

一九五八（昭和33）年 73歳

「メントモリ」（『信濃教育』）。

一九五九（昭和34）年 74歳

「Todesdialektik」（死の弁証法）（『マルティン・ハイデッガー七十歳記念論文集』）。

一九六〇（昭和35）年 75歳

「マラルメ覚書」（『声』）。

「禅源私解」（『仏教と文化 鈴木大拙博士頌寿記念論文集』）。

一九六一（昭和37）年 77歳
「生の存在学か死の弁証法か」（『哲学研究』）。

未完遺稿
「哲学と詩と宗教——ハイデッガー・リルケ・ヘルダーリン」（全集版収録）

- 240, 262, 263
微 分 67, 73, 89, 90, 91, 112, 192, 282, 283, 284, 300, 301
不確定性 23, 24, 82, 83, 84, 86, 90, 92, 93, 96, 97, 98, 100, 111, 112, 114, 116, 197
不確定帯 84, 101, 102, 108, 112
フッサール 293, 294, 295, 297
プラトン 35, 36, 42, 43, 49, 57, 58, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 254, 293
プランク 62, 85, 90
プロティノス 132, 135, 280, 286
ヘーゲル 9, 26, 28, 52, 121, 122, 125, 127, 128, 129, 130, 155, 157, 161, 212, 213, 214, 215, 248, 279, 281, 283, 287, 289
ベルグソン 22, 141, 145, 234
ボア 38, 84, 86, 88, 89, 90, 92, 93, 94, 96, 97, 99, 100, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 111, 115, 116
- マッハ 44, 45, 54, 55, 65, 69, 71, 72, 74, 85
民族 28, 30, 56, 196, 197, 199, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 210, 217, 221, 251, 261, 263
無限 22, 65, 72, 83, 89, 93, 112, 130, 139, 146, 147, 164, 180, 224, 239, 240, 241, 243, 244, 245, 247, 248, 249, 250, 255, 256, 257, 258, 260, 270, 277, 282, 283, 289, 290, 291, 299, 300, 301
無即愛 164, 165, 166, 167, 168, 176, 178, 179, 180, 181, 189, 190, 192, 194, 195, 198, 199, 202, 203, 208, 212
無の媒介 166, 178, 181, 189, 191, 195, 197, 265
無の弁証法 132, 136, 207, 208
無媒介 110, 123, 124, 140, 142, 143, 144, 153, 156, 163, 164, 165, 166, 167, 181, 186, 188, 200, 213, 214, 230, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 242, 246, 247, 248, 257, 258, 261, 264, 269
目的論 57, 58, 60, 62, 63, 67, 151, 152, 174, 175, 176, 177, 178, 179
唯物論 52, 68, 125, 177, 178, 214, 214

ライプニッツ 49, 51, 64, 67, 231
量子子 73, 78, 89, 90, 91, 93, 94, 95, 97, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 108, 111, 113, 115
量子現象 84, 89, 95, 96, 101, 111, 112
量子力学 37, 83, 91, 92, 93, 100, 104, 106
量子論 23, 52, 72, 73, 74, 78, 79, 80, 81, 82, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 108, 112, 113, 114, 115, 116
類 35, 36, 37, 42, 67, 121, 153, 155, 156, 230, 263
類個相即 154, 155, 156
レオナルド（ダ・ヴィンチ） 38, 39, 60, 61

- 知即行 26, 29
抽象性 39, 40, 54, 80, 81, 120, 129, 156, 185, 198, 210, 287, 295
抽象的 10, 36, 38, 41, 45, 55, 56, 69, 71, 75, 77, 96, 98, 110, 121, 135, 136, 140,
147, 177, 183, 198, 213, 249, 277, 285, 294, 295, 296, 300
直接的 30, 81, 103, 110, 132, 134, 138, 142, 143, 145, 153, 154, 156, 163, 178,
221, 222, 232, 236, 238, 252, 265
デカルト 49, 51, 64, 67
転換的統一 136, 152, 168, 189, 192, 194
転換媒介 10, 11, 14, 143, 144, 150, 174, 183, 201, 227, 229, 230, 231, 233, 239,
246, 254
同一性 35, 36, 38, 39, 42, 52, 59, 69, 82, 85, 86, 104, 120, 123, 124, 128, 132, 134,
136, 138, 153, 162, 164, 165, 166, 167, 169, 175, 176, 177, 178, 184, 187, 192,
193, 229, 235, 237, 249, 252, 255, 257, 258, 265
同一性論理 44, 81, 125, 132, 136, 153, 165, 173, 174, 192, 207, 208
道 元 186, 187, 190, 193, 194, 195, 196, 199, 218, 219, 220, 223, 225, 226, 228,
229, 230, 231, 232, 233, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248,
250, 251, 252, 254, 255, 256, 257, 258, 261, 264, 266, 267, 268, 272, 274
動即静 10, 25, 26, 87, 242, 246, 248, 254, 257, 258, 260
動的統一 37, 42, 72, 78, 82, 85, 163, 192, 247, 250, 257, 261, 262
独立 15, 17, 23, 26, 41, 49, 50, 51, 52, 53, 57, 61, 66, 68, 70, 75, 82, 83, 91, 99,
102, 116, 117, 118, 119, 123, 124, 125, 133, 142, 150, 248, 279, 281, 288, 300
- 内的生命 277, 278, 280, 288, 289, 293, 295, 296, 297
ニウトン 39, 48, 51, 53, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 70, 74
二律背反 22, 23, 24, 25, 26, 28, 115, 119, 126, 127, 130, 137, 138, 154, 161, 164,
166, 170, 177, 178, 192, 195, 197, 206, 208, 211, 224, 249, 251, 269, 270, 271,
272
認識論 48, 49, 51, 65, 66, 75, 83, 84, 90, 92, 96, 99, 122, 123, 294
- 媒介統一 25, 55, 86, 157, 176, 182, 184, 185, 194, 202, 230, 237, 239, 248, 263
ハイゼンベルク 23, 88, 90, 92, 96, 99, 100, 104
ハイデッガー 145, 252, 254, 266, 294, 295, 296, 297
発出論 280, 283, 285, 289
パルト 147, 148, 159, 160, 161, 162, 163, 165, 166, 167, 178, 180, 188, 200, 202,
208, 209, 210, 211
非合理性 42, 46, 91, 281, 287, 288, 290, 291, 299, 300, 301
否定即肯定 10, 12, 14, 23, 27, 30, 105, 115, 124, 127, 141, 145, 152, 168, 203, 228,
229, 233, 234, 235, 237, 241, 243, 245, 249, 250, 254, 259
否定的媒介 24, 25, 47, 105, 120, 121, 123, 128, 139, 140, 142, 147, 153, 164, 178,
181, 184, 188, 195, 201, 202, 204, 207, 208, 212, 224, 227, 231, 232, 235, 236,
240, 244, 249, 250, 255, 263, 266, 268, 270
否定媒介 141, 155, 163, 164, 165, 169, 176, 184, 187, 189, 196, 201, 202, 208, 213,

- 神 話 184, 185, 190, 191, 195, 196, 197, 198, 203, 207, 208, 209, 210, 224, 227
生成即行為 71, 86, 256, 263, 264
積 分 67, 192, 283, 284, 290
絶対者 15, 124, 142, 143, 144, 150, 154, 183, 184, 184, 285
絶対宗教 211, 212, 213, 214, 215, 216
絶対性 27, 74, 119, 145, 148, 149, 150, 162, 163, 164, 165, 167, 168, 184, 200,
202, 213, 214, 215, 216, 235, 242, 257, 289, 290, 291
絶対転換 124, 125, 134, 138, 140, 143, 152, 157, 162, 164, 168, 188, 189, 227, 238,
242, 249, 251, 259
絶対統一 124, 130, 134, 237, 238, 241, 242, 254, 255, 256
絶対媒介 105, 142, 143, 157, 162, 163, 164, 169, 178, 200, 204, 213, 214, 215, 229,
233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 242, 243, 245, 246, 247, 254, 255, 258,
261, 264, 268, 269
絶対否定 10, 12, 14, 25, 26, 29, 30, 43, 46, 58, 77, 104, 109, 110, 119, 121, 124,
131, 132, 136, 138, 139, 140, 141, 145, 148, 150, 154, 157, 162, 163, 164, 165,
166, 167, 168, 171, 174, 175, 176, 177, 178, 185, 198, 200, 201, 203, 210, 224,
227, 228, 229, 230, 233, 234, 235, 236, 241, 242, 243, 244, 245, 249, 250, 253,
254, 259, 262, 263, 264, 267, 268, 269, 271, 272
絶対弁証法 119, 134, 138, 140
絶対無 10, 15, 28, 84, 85, 86, 87, 119, 132, 136, 141, 143, 145, 152, 163, 164, 167,
168, 171, 176, 178, 184, 186, 187, 191, 195, 200, 202, 206, 214, 233, 265, 272,
273, 278, 279, 281, 289, 292, 298
絶対無の自覚 277, 278, 280, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292,
296, 297, 298, 299, 300, 301
相応原理 84, 86, 89, 90, 96, 97, 99, 100, 103, 106, 108, 114, 115
操作主義 73, 79, 81, 82
操作論 55, 73, 75, 76, 79, 81
相対者 10, 15, 142, 143, 150, 168, 184, 197, 227, 230, 239, 240, 243, 244
相対性原理 55, 72, 73, 74, 76, 79, 80, 103, 104, 106
相対性理論 23, 52, 65, 72, 73, 74, 77, 78, 79, 80, 81, 248
相対性論 73, 78, 88, 89, 91, 98, 104, 104, 248
相対即絶対 10, 14, 25, 27, 245
相排的 78, 83, 86
相補性 83, 84, 86, 92, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 107, 108, 111
相補的 72, 77, 78, 81, 86, 95, 96, 97, 99, 100, 102, 106, 107, 116
疎 外 29, 44, 76, 86, 157, 184, 214, 215, 263
存在論 37, 43, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 60, 67, 68, 75, 83, 84, 125, 129, 130,
131, 132, 133, 135, 136, 137, 138, 153, 154, 242, 243, 252, 253, 264, 268, 295

大乗仏教 185, 186, 195, 197, 198, 208, 209, 215, 216, 224, 228, 243, 250, 258, 261,
264, 267, 270, 272, 274
他 力 154, 167, 170, 176, 180, 183, 185, 189, 190, 208, 260

- 189, 190, 194, 202, 208, 214, 216, 227, 228, 236, 242, 243, 247, 248, 249, 250,
252, 260, 266, 272
行為的自覚 85, 86, 87, 112, 152, 237, 239, 245, 253, 267, 298
行為の弁証法 132, 152
交互関係 66, 76, 82, 95, 100, 101, 190
交互的 27, 46, 52, 59, 69, 77, 80, 85, 101, 102, 103, 114, 145, 148, 155, 234, 260,
261
交互的媒介 53, 58, 66, 72, 81, 176
交互媒介的 54, 69, 77, 85, 204, 238
交互否定 41, 42, 76, 82, 85, 95, 96, 109, 188, 189, 194, 201, 212, 222, 224, 228,
259, 263, 272
合理主義 30, 39, 44, 59, 68, 214, 222, 287
古典物理学 73, 76, 80, 81, 84, 88, 94, 96, 97, 99, 103, 106, 111, 115
- 懺悔 144, 147, 160, 165, 166, 167, 168, 170, 171, 172, 176, 180, 181, 182, 191,
201, 203, 208, 211, 212
シェリング 28, 52, 122, 124, 125, 135, 170, 175, 176, 196, 279
自己限定 265, 267, 276, 277, 278, 280, 287, 288, 294, 295, 298
自己同一 104, 120, 124, 132, 133, 134, 138, 143, 144, 146, 175
自己否定 9, 10, 19, 25, 26, 47, 106, 110, 127, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140,
144, 150, 154, 156, 157, 163, 167, 168, 170, 171, 175, 188, 190, 197, 208, 210,
211, 212, 214, 215, 216, 249, 282, 289, 291, 292
自己放棄 144, 165, 176, 178, 179, 180, 190
死即生 119, 132, 138, 141, 186, 249, 265, 274
死復活 168, 202
種 35, 36, 37, 42, 67, 112, 120, 121, 133, 153, 154, 155, 156, 157, 184, 199, 200,
201, 203, 204, 205, 206, 211, 223, 230, 263, 264
自由の媒介 24, 172, 183
主観主義 26, 69, 74, 81, 82, 92, 133, 147, 155
主観即客観 76, 81, 82, 83, 85, 86, 152
種族 17, 120, 152, 153, 155
止揚 25, 27, 52, 55, 82, 84, 114, 115, 119, 134, 144, 147, 149, 156, 221, 230,
250, 267, 270, 271, 272, 282
自律 50, 51, 52, 57, 60, 61, 66, 67, 68, 75, 76, 124, 140, 147, 148, 150, 153, 170,
174, 196, 206
自立 53, 54, 67, 72, 75, 76, 81, 116, 140, 147, 150, 175, 224, 226, 231, 235, 249,
262, 263, 271
人格 153, 154, 155, 163, 164, 165, 182, 184, 185, 199, 210, 224, 265, 266
信行証 143, 227, 236, 248, 265
身心脱落 187, 188, 189, 232, 243, 245, 259, 260
神秘主義 15, 27, 28, 98, 132, 185, 188, 238, 242, 266
親鸞 190, 193, 194, 199, 223, 230, 236, 240

索引

(キーワード+主要人名／五十音順)

- AINSTAIN 23, 73, 74, 77, 78, 84, 85, 100, 102, 104, 106
アリストテレス 17, 34, 35, 36, 37, 42, 43, 49, 51, 57, 58, 59, 61, 63, 64, 129, 130, 132, 133, 135, 207, 214, 292
イデヤ 36, 41, 287, 298, 300, 301
永遠の今 145, 192
演 繹 34, 56, 59, 61, 65, 66
往 相 128, 144, 145, 146, 147, 148, 150, 154, 176, 181, 182, 183, 185, 189, 190, 194, 242, 247, 248, 249, 260
- 科学的認識 22, 30, 49, 50, 61, 64, 160, 183, 270
確 率 82, 83, 85, 90, 91, 92, 93, 95, 101, 111, 112, 113, 114
我 性 175, 177, 180
ガリレイ 34, 35, 36, 38, 39, 51, 61, 62, 63, 65
カント 22, 25, 26, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 125, 127, 128, 129, 130, 131, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 147, 151, 155, 168, 170, 174, 175, 176, 177, 196, 206, 265, 270, 271, 278, 279, 293, 297, 298, 299, 302
キエルケゴール 130, 132, 138, 139, 141, 147, 148, 161, 162, 165, 167, 179, 180, 188, 265
機械論 59, 68, 82, 114
幾何学 56, 59, 60, 61, 64, 65, 67, 70, 73, 74, 77, 78, 80, 106, 145, 248
帰 納 34, 35, 36, 51, 61, 70, 130
客観主義 26, 69, 93, 112
客観即主観 76, 85, 86, 110
教行証 236, 237, 248
教行信 236
教行信証 230, 236, 237, 248
行 証 168, 179, 185, 189, 192, 193, 199, 208, 214, 248
行 信 167, 168, 170, 171, 178, 184, 191, 193, 195, 197, 214, 236
行信証 192, 216, 232, 246
形式的 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 66, 67, 69, 74, 88, 90, 92, 93, 97, 99, 102, 114, 122, 130, 183, 184, 286, 293, 294, 298
解 脱 146, 182, 183, 185, 187, 189, 190, 191, 194, 228, 245, 259, 260
現成公案 28, 239, 244, 269, 272, 273, 274
還 相 128, 144, 145, 146, 147, 148, 150, 152, 154, 155, 176, 181, 182, 183, 185,